

ダウンアンダーの国から②

大貫 映子

三十代の女性の泳力はすごい。水泳王国・豪州では、母親も一人の人間として自分の好きなスポーツを続けるのは当然と、様々な大会に挑戦しています。

「イツ・ア・スモール・ワールド（世界は狭い）!!」と思わず三人で声を上げた。続いて「お互いに何でここにいるの!？」

異国での出会い

人口六十人のポルトグレゴリーという小さな町で聞かれた一・六kmを海で泳ぐ大会の事。参加者六十人の中に夫婦揃ってチャネルスイマー（英仏海峡横断泳者）のダイクソン夫婦がいた。奥さんのコリーはオランダ出身。一九七八年には、その年で最も速い記録を出したチャネルスイマーに与えられるローレックス賞を受賞している。パートナーのレイはイギリス人で、自らもスイマーであり、かつ世界中からの挑戦者をサポートするパイロット（伴走船の船長）も務めていた人だ。

実は私ももう十二年も前になるが、（そんな前かあ……と愕然）チャネルスイマーの仲間入りをさせてもらったのだが、レイの方は良く知っていて「ああ、日本人で初めてのチャネルスイマーだろう。覚えてるよ。コリン・クックの船がサポートしたよね」と言っていて感激した。

ダイクソン夫妻は三年前の一九九一年に子どもたち（十三才と八才）のことを考えて、豪州に移住してきたのだという。暖かい気候と広々とした自然で子どもたちは育つのがいいといいながら、なんのなんの、ご本人たちこそ、水泳天国豪州にはピットリという感じ。その日もコリーは何と総合男女あわせて堂々三位入賞。（四十歳ですよ!）レイも八位にはいった。それぞれ年齢別男女別表彰では当然のように一位。ちなみに私はトータルで十一位。年齢別では五位だった。

この大会、一〜四位は女性が占め、しかも、三十代の部に強豪が集中していたのには驚いた。優勝したナンシー・ワコックさん（三五）は一才にならない赤ちゃんのお母さん。よりによって私もこの年齢別グループ。いくら日本で水泳の経験があるからといっても、ここ豪州では、私など入り込む余地のないほどみんな同世代がコンスタントにかなりの泳力を維持している。

日本ではおそらく、ちようど子育てや、仕事などで泳ぐ時間がとれず、マスターズ水泳の三十代女性のエントリーは比較的少ないはず。母親だろうと

一人の人間として自分の好きなことを続けるのは当然という考えのもとにパートナーとうまく協力しあい、長くスポーツを続けるゆとりを感じる機会が多い豪州の生活だ。

ユニークな大会が目白押し

今年の夏はこの大会を皮切りに、私は三つのオープンウォーター水泳（自然の中を泳ぐ）の大会を楽しんだ。実際の大会の数はその何倍もあった。パリス周辺だけでも十月から四月まで毎週土、日はどこかで必ず開催されていたといっている。ほとんどは十代から八十代以上までが参加する、日本でいう市民マラソン大会の水泳版といった感じだが、中には「十六kmスワン・リバー水泳」とか、パリス郊外にあるコテスローというビーチからその沖に浮かぶロットネス島までの「ロットネス



▲息子の大介君と筆者（ロットネス島で）

海峡横断二十km水泳などというものまである。この海峡横断には三年前からリレーの部も加わり、参加者の幅が広がった。リレーにはデュオ（二人一組）とカルテット（四人一組）とあり、各泳者の交替時間などはチームごとの作戦にまかされるというルールもユニークだ。一人五分ずつ交替で目まぐるしくいくチームもあれば、一人のスイマーが一回だけ泳ぎあとは四人だけで交替で泳ぐというのもあり、なのだろう。英仏海峡にはトンネルも開通してしまったことだし、海もこちらの方が温かいし、海で泳ぐのが好きなチャレンジ好きなマスターズスイマーには是非お勧めしたい大会の一つだ。ちなみに開催は毎年二月中旬の土曜日。

五月の声を聞き、朝晩は十一度まで気温が下がるようになってきたが、まだまだイベントは続く。ヒョンなことから知り合った人から誘われたのがトライアスロンリレー。私はもっぱら水泳担当だが、一年を通じて四種目、五種目という組み合わせのカヌーや馬も加わるユニークなものまであって、遊ぶことには事欠かない環境だとつくづく思う。